

## 悲劇の皇帝マクシミリアン I 世(II)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊池, 良生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/5016">http://hdl.handle.net/10291/5016</a>

## 悲劇の皇帝マクシミリアン一世（II）

菊池良生

II 兄、皇帝となる。

一、

舞台は帝都ウィーンを北北東に約一六〇キロいったモラヴィアの静かな小都市オルミュッツ（オロモウツ）の大司教館、玉座の間。一八四八年十二月二日のことである。やがて午前八時。アルフレート・ヴィンディッシュグレート、バヌス・イエラチッチ両將軍、シュヴァルツエンベルク宰相、グリュンネ伯爵ら重臣が盛装に身をかため参内。続いてハプスブルク家一門のオーストリア大公、大公妃らが威儀を正してそれぞれの席に就く。室内にピーンと張り詰めた緊張が走る。ややあつて、侍従武官長ヨーゼフ・ロプコヴィッツ侯爵とフルステン方伯夫妻先導のもと、皇帝夫妻、皇帝の弟フランツ・カール大公、その妻ゾフィー大公妃、そして大公夫妻の長男フランツ・ヨーゼフ大公が登場する。皇帝

夫妻は玉座の前に置かれた肘掛け椅子にそれぞれ腰を下ろす。静寂。

儀典長アレクサンダー・フォン・ヒュープナー伯爵が一枚の紙片をフェルディナント一世皇帝陛下に恭しく手渡す。

「朕思うに、諸般の事情を鑑み、いま決然と帝冠を脱ぐを決意するにいたりたり。而して、朕が甥フランツ・ヨーゼフ大公の成人に達することをここに宣言するものなり。尚、朕が弟フランツ・カール大公は、ハプスブルク家家憲、及び帝国法に定められた大公の皇位継承権を、長子フランツ・ヨーゼフ大公が為に決然と放棄せんことを宣言するものなり。」  
フェルディナント一世は万感胸に迫つたか、いつにも増して、声震るわせ、吃音がちに朗読した。無論、儀式はさらに続く。儀典長ヒュープナーの回顧録を引いて見る。

「続いて、普段はあれほど沈着、冷静なフェリックス・シュヴァルツェンベルク侯爵が今日ばかりはいつもより青ざめ、ひどく動揺し、フランツ・ヨーゼフ大公の成年証書、大公の父上の皇位放棄証書、そして最後に退位についての皇帝陛下の詔勅を大きな声で、そして震えながら読み上げた。陛下とフランツ・カール大公殿下がこれらの文書に署名されると、青年皇帝が歩み寄り、伯父上の前に跪き、その祝福を受けた。「神のお恵みがあらんことを！」フェルディナント一世陛下はおおせられた、「しっかりおやり、うまくいくさ」と。皇后陛下は若い君主を我が胸にお抱きになられ、長いあいだ御両腕で御抱擁を続けられた。まなこをぬらさぬ人としていなかった」

しかしこれで舞台に幕が降りたわけではない。クライマックスはこれからやって来る。

新皇帝フランツ・ヨーゼフ一世が文書に署名する。続いて数多のオーストリア大公を従える恰好で列の先頭にいたフェルディナント・マクシミリアン大公が署名する。本稿の主人公マックスである。彼は兄の皇帝即位により、皇位継承順位第一位者となったのである。やがて列席者全員の署名がすむと、前皇帝フェルディナント一世夫妻が退場する。儀式は終わった。

このとき儀典長ヒューブナーはある誘惑に駆られた。この明治時代の日本を訪れたこともある外務省きつての切れ者は硬骨の士である（後に栄進した警察大臣の職を賭して皇帝フランツ・ヨーゼフ一世に諫言し、あっさり辞職する）。そして同時にその著「世界周遊記」（その第二部に日本篇が入っている）、大著「シクストゥスV世伝」で世に知られた文人でもあった。文人ならだれでもそうするだろう。彼は歴史的瞬間の文字通りの目撃者となったのである。しかもとびきりスキャンダラスな瞬間である。

君主がその治世半ばで退位する。王朝交代ではない。ハプスブルク王朝はさらに続くのだ。かといって自ら退き、院政を敷くというのでもない。あらゆる権力がその手からすりりとぬけおちるのである。退位を余儀無くされたのだ。これはハプスブルク家の長い歴史においても前代未聞のことである。「虚弱な君主」フェルディナント一世は自らの退位詔勅書にどんな思いで署名したのか。いかに息子のためとはいえ、己の野心を捨てて、否、己の統治能力欠如を満天下に知らせる形で皇位継承権放棄書に署名したフランツ・カール大公の心中は。僅か十八歳になったばかりの新皇帝フランツ・ヨーゼフ一世は。思えばぞくぞくする瞬間である。この歴史的署名に使われた羽ペンの一つ。文人外交官がこれを我が物としたい、と思ったのも無理はない。

かくしてヒューブナーは件の羽ペンを人目につかぬようそつと上着にしまいこもうとした。すると最前列にいた我が主人公マックスがそれを目敏く見つけ、血相を変え、儀典長に詰め寄り、彼から羽ペンを奪い取った。そして一声。

「このペンを手にする資格は私にしかないのだ！」

その声のあまりのおおきさに玉座の間をいた人々は皆啞然とした。そして啞然としながらも、この皇弟殿下の場所柄

も弁えぬ振る舞いに不快感を露にする一群の人々がいた。シュヴァルツエンベルク侯爵を筆頭とする兄皇帝の重臣たちである。

皇帝が治世半ばにして退位する。そして新皇帝の即位。しかも帝都ウィーンを遠く離れたモラヴィアの小都市での君主交代である。このスキャンダラスな事件はとりもなおさず連綿と続いてきたハプスブルク王朝の危機を示している。この社稷を揺るがす危機は根深い。王朝の構造的欠陥に根差している。それを、「愚帝」フェルディナントⅠ世の十三年に及ぶ統治の弊害、といった個人的問題にすり替え、「颯爽たる青年皇帝」フランツ・ヨーゼフⅠ世を即位させることによって危機を一先ず隠蔽する。これがシュヴァルツエンベルク宰相の戦略である。勿論、宰相の慧眼はハプスブルク家の抱えている構造的欠陥を見落としはしない。それがあまりにも由々しきが故に、君主交代というパッチ・ワークを施せざるを得なかったのである。そして彼は「颯爽たる青年皇帝」という個人レベルでのこれ以上ない絶対の切り札を駆使しながら、王朝組織の建て直しをはかろうとしているのである。彼が夢見たものは、「颯爽たる青年皇帝」という情緒的表看板の下で、実は物事すべてをシステムとして処理する組織である。つまり、表看板である筈の青年皇帝フランツ・ヨーゼフⅠ世その人ですら容易に容喙できぬ非情の組織である。こんなことをもくろんでいたシュヴァルツエンベルク侯爵にとって、皇位継承順位第一位者となつたばかりのマックスの一声は不快以外のなにもでもなかつた。「このペンを手にする資格は私にしかないのだ！」と、ハプスブルク家特有の大声で、いやしくも儀典長という新皇帝股肱の臣となるべく、事実そうなつたヒュープナー伯爵に満座のなかで恥を搔かせたのだ。このマックスの遣り口は、新皇帝の次弟という個人的立場に寄り掛かった、否、狎れた軽率極まる行為であつた。ハプスブルク王朝という組織を個人的なもので解体しようとする危険極まる振る舞いであつたのだ。

それでは、このとき未だ体内に宿る少年の匂いを凜々しき白い軍服のなかに封じ込めんと必死になつていた青年皇帝

フランツ・ヨーゼフは弟マックスの一声にどう対応したのだろうか。兄は弟のこの振る舞いにこめかみをふるわせたという。するとヨーゼフもまたマックスの一声を、彼我に千里の徑庭のあるを知らず、つい昨日までの兄弟の情に狎れた組織破壊の危険な徴候と見做したのか。それはわからない。ちなみに、この即位典禮のとき新皇帝ヨーゼフは十八歳、弟マックスは十六歳であった。弟マックスは論外としても、兄ヨーゼフとて、組織・制度というものは個の生理を排除・圧殺する完璧な閉空間なのだ、ということをごだけ理解していただろうか。ただ、理解していなくとも、彼はこうした閉空間にとりこまれながらも苦もなく自らを首尾一貫させることができる個の生理の持ち主であったようだ。

つまり、フランツ・ヨーゼフは自分の個人的生理を王朝組織のなかに封じ込める。しかし、それは先帝フェルディナント一世のように前宰相メッテルニツヒ公爵御愛用の自動署名機械となることでは断じてない。自らの意志により組織に個を埋没させるのだ。そして、埋没させた個が組織という器のなかでゆつくり醸成していくのを辛抱強く待ち、六八年にもおよぶその統治の終わりには、ハプスブルク王朝すなわちフランツ・ヨーゼフ一世、といわれるほどの組織と個の見事な調和をつくり上げていくことになるのである。しかし、このことはまだ先の話である。

ともあれ、ヨーゼフはときならぬ大声にこめかみを振るわせた。こうして本稿の主人公マックスの軽率な振る舞いは、兄ヨーゼフからさえも無言の指弾を受けたのである。兄弟のあいだに最初のはっきりした亀裂が走ったのだ。むしろその徴候は兄弟の成長の過程にいくらでもみられた。そしてこの兄弟成長の過程とは同時にハプスブルク家衰運のそれでもあった。

「ああ、ママ、私達はここ数年もの間、とても幸福でした。あのお方に、敬愛すべき陛下によって私達は護られ、愛され、善導されてまいりました。それなのに私達はいまなんという不幸にあるのでしょうか。私達から陛下を奪い去ったあの恐ろしい一夜いらい、私達は完全に見捨てられてしまいました。陛下は私達の唯一の護り神で、救世主であられました。世界はいま音をたてて崩れ落ち、私達は陛下とともに破滅せざるを得ないという気がしてなりません」

ヨーゼフ、マックス兄弟の母ゾフィー大公妃が実家の母、バイエルン皇太后カロリーネに宛てた手紙である通り、オーストリア皇帝フランツⅠ世は一八三五年五月二日、この世を去った。享年六七歳。その治世、実に三二年間であった。

直ちに皇太子フェルディナントが即位する。このときヨーゼフ四歳、マックス二歳。新帝フェルディナントⅠ世夫妻には子供がいない。つまりヨーゼフは皇位への階段を一段上ったことになる。舅の死による一時的ショックから覚めたゾフィーはバイエルンの母に二伸する。

「御心配なくおかあさま、全てがうまく運ぶだろうと思います……、私達は依然としてここでは主同然であります。もつともそれも哀れな皇帝が嗣子を得た瞬間になにかも駄目になってしまいますが」

しかし「哀れな皇帝」フェルディナントⅠ世が嗣子を得ることなど絶対にありえない。この絶対的事実を軸にして様々な策謀がウィーン宮廷内を走る。その中心に二人の人物がいる。先帝フランツⅠ世時代、権勢を恣のままにきたときの宰相メツテルニツヒ公爵と、「世継ぎのプリンス」ヨーゼフを産んだゾフィー大公妃。

メツテルニツヒの策謀は先帝が死の床にあるときから始まった。先ず皇帝の告解僧ワグナー司教を抱き込む。宰相と司教はフランツ帝の遺言を作製する。曰く、

「余はこの遺言書によつて、(空欄)の名を有す男を、余の子息にとつては満腔の信頼を寄せるにふさわしき忠誠なる補佐として、余の子息をこの男に特に委任する」(高原富保訳)

司教は帝の床近くにより、この遺言書の空欄補充を迫る。帝も進んで書き入れる。フェルスト・フォン・クレメンズ・ヴェンツェル・ロタール・メツテルニツヒと。

しかしこれだけでは安心できない。フランツ帝の死を契機にウィーン宮廷内の勢力図を一気に書き換えんとするものがある。宰相の宿敵コロフラート伯爵。伯はきわめつき保守主義者であるが、反メツテルニツヒ陣営を大同団結させるために、しきりに進歩的ポーズを取り始めている。そしてこの反宰相陣営には大立て者が控えていた。ほかならぬフランツ帝の弟カール大公、ヨハン大公らである。カール大公とはかつて軍神ナポレオンを敗走させ「アスペルンの勝者」という輝かしき異名をとり、全六巻にも及ぶ軍事学の書を著わしたオーストリアの名将である。一方、ヨハン大公はこの頃シュタイアマルクの郵便局長の娘アンナ・プロツヒルとの間のいわゆる貴賤婚を貫き通し世の喝采を浴びていた。彼は後の一八四八年革命のさい、ドイツ帝国摂政を勤めた進歩主義者である。両大公、ともに幼いときからその人間的資質は長兄フランツよりも数頭上と囁かれていた人物である。

コロフラート伯はともかくこの両大公だけはなんとしても抑え込まなければならない。そこでメツテルニツヒ宰相とワグナー司教は死にいくフランツ帝から、新皇帝フェルディナントは二人の叔父、カール、ヨハン両大公の進言に一切耳を傾けることなく、ただ一番下の叔父ルートヴィッヒ大公にのみ相談せよ、という言質をとる。もちろん、ルートヴィッヒ大公とはおとなしいだけが取り柄の従順そのもの人物である(この頃フレデリック・モートン著、高原富保訳



「ロスチャイルド王国」参照。

こうしておいて宰相メッテルニツヒは新帝フェルディナントを宰相愛用の自動署名機械にすべく最後の手段をこうじる。自身を含めた宰相会議の設置である。新帝は虚弱にあらせられ、御自ら御政務にあたられること甚だもって難。よって帝をお護り、補佐する会議を設置する。会議！なんと進歩的響きのする言葉だろうか。もちろん、響きだけである。メッテルニツヒの狙いは別にある。つまり、新帝の統治はすべてここから発し、然もその責任は会議員一人一人に分散される。失政あつても決して一人に責任をかぶせてはならない、というわけだ。要はこの会議を牛耳ればよい。会議員は四人。議長はルートヴィヒ大公。メッテルニツヒの手のうちにある。宮廷に隠然たる勢力を持つコロフラート伯も加えておく。反メッテルニツヒ感情の適当なガス抜きにもなるし、つかいようによっては宰相の恰好な盾ともなる。さて最後の一人は？ 新帝の弟フランツ・カール大公である。いうまでもなくゾフィーの夫である。

ヨーゼフ、マックス兄弟が生まれたフランツ・カール大公家の家長は父大公ではなく、母ゾフィーであった。メッテルニツヒはこのウィーン宮廷で異彩を放つ男勝りの女傑ゾフィーと手を結んだのである。ゾフィーもゾフィーで、かつて義兄フェルディナントの結婚を画策し、自分を一時的にせよ絶望の奈落に叩きおとした張本人メッテルニツヒに近づいた。こうしてゾフィーは凡庸な夫フランツ・カール大公を自分の傀儡として宰相会議入りさせることに成功する。勿論、宰相も二重の保険を掛ける。ヨーゼフ、マックス、さらに三男カール三兄弟の傅育をメッテルニツヒの二人の腹心、ハインリッヒ・フォン・ボンベルス伯爵、コロニーニークロンベルク伯爵が引き受けることになる。

こうして両伯、といつても主にコロニーニ伯によるヨーゼフ、マックス、カール三兄弟の教育が始まる。「ボンベルス伯は大変気さくなかたですが、コロニーニ伯にはまったくがっかりすることがすくなくありません」と母ゾフィーが嘆くほど伯の教育は峻厳きわまり、ときにサディステイックでさえあつたようだ。先ず語学。フランス語、英語はいう

に及ばず、ざっと一ダースの言葉をおぼえなければならぬ。これは家領に多数の民族を抱えるハプスブルク家特有の事情でもある。次に法律、軍事、歴史、文学、芸術、自然科学、宗教等々、実に多岐に渡る。十歳を出たか出ないかの子供たちが週に五十時間の授業を受けるのである。しかしヨーゼフはどの教科も満遍なくそつなくこなす。一方マックスは自分の興味をひくものしかやらない。文学、造形芸術、歴史。

母ゾフィーが一度ホーフブルク宮にアンデルセンを招き、子供たちのためにメルヘンのいくつかを朗読させたことがある。これを恍惚として聞くのがマックス。ヨーゼフはつまらなそうな顔をするだけである。またマックスは僅か六歳のとき、ある展覧会でモーリッツ・ミヒヤエル・ダフィンガーの描いた一枚の肖像画に魅せられたことがある。どうしても欲しい、と言った。勿論、その絵の値段は毎月きめられた小遣いの額を遙かに越えている。でもどうしても欲しいとむずかり、おつきのものを困らせた。マックスの興味をとくにひく歴史とは我が家族史、すなわち栄光あるハプスブルク家の歴史である。ハプスブルク家の光輝あふれる歴史を担ってきた先祖たちの肖像画画廊をつくってくれとせがみ母ゾフィーをてこずらせたのはマックス七歳のときである。

兄ヨーゼフの欲しがる玩具といえば鉛の兵隊と要塞。マックスには小動物や小鳥が玩具である。マックス八歳の誕生日にゾフィーがシェーンブルン宮の庭園の隅に小鳥小屋を建ててあげるとマックスは狂気乱舞する。さらに同庭園にシユロなどの熱帯植物でなる小苑ができると日なが一日そこに入りびたる。思い昂じて、小苑のなかにインディアン風の小屋を建て、槍と彩画した盾とで飾りつけ、空想のジャングル王国宮殿に見立て、自らババニン国王を名乗り悦に入る。ヨーゼフがこの宮殿に招待されたとき思わず叫んだ。「マックス、これは一体いくらかかったんだ!」。勿論、この宮殿建設費用はマックスの小遣いでは到底まかなえるものではない。母ゾフィーがヨーゼフに隠れてそつと援助したのである。

ゾフィーはいつもそうだった。マックスを溺愛した。この子は生まれつき病弱である。痩せて、肌の色も青白い。そこに肺病病みだったライヒシュタット公の倅を無理にも見ようとするてあいはいまでもいる。とまれ、母はこの病弱な次男を「私のやせつぼちさん」といつてあまやかす。「おかあさまにはとても想像がつかないでしょう。この子は一たん怒りだすと手が付けられません。顔面が恐ろしく歪み、下唇と下顎が上顎にくつつきそうになります。目をパチパチしばたかせ、本当に恐ろしい顔つきになってしまいます。普段はあんなに優雅な顔がこんなふうに変形してしまうなんて、とても信じられないくらいです」と、母ゾフィーが祖母カローリーネに孫マックスの消息を知らせる手紙もいかにも樂しげである。こうしてマックスは無邪気に、想像逞しい、愛嬌たつぷりの人好きのする次男坊として育っていく。宮内内では行い澄まし妙に大人びた兄ヨーゼフより遙かに人気者となる。

「そんなふうだから、ヨーゼフ、マックス兄弟が一緒にふざけ、いたずらをしてもゾフィーはいつも「フランツィ（ヨーゼフの愛称）いけません！」とヨーゼフだけをきつく叱る。マックスはわつと泣き出し、それで無罪放免だ。ヨーゼフには勝手な行動が許されないのだ。この母の差別待遇にヨーゼフは深く傷ついただろうか。否、そうでもないらしい。なにしろ、彼は僅か四歳のとき初めて宮中の祝宴に参列を許されたとき「万事、折り目ただしくね」というゾフィーの言いつけを完璧に守り通し、並みいる大人たちを感嘆させたくらいの子供である。つまりヨーゼフはこの母の差別待遇を、自分にかけられたピンと張り詰められた期待の念と受け取ったのである。

事実、そうだったのだ。ゾフィーは徹底して差別した。未来の皇帝ヨーゼフと弟たちを。彼女は自ら帝王学を授けるつもりで、長子ヨーゼフをなにかにつけて激しく躰たのである。マックスはやがて知ることになる。差別されているのが兄ヨーゼフではなくマックス自身であるということ。ヨーゼフが十一歳、マックスが九歳のときのエピソードを引いてみよう。

折りしも、ハプスブルク家の夏の離宮シェーンブルン宮殿では母ゾフィー肝煎りによる子供劇場が幕を開けようとしていた。出演者はハプスブルク家の公達。主演は誰か。宮廷中の人気者マックスがふさわしい。彼なら演技に必須の感情移入をたやすくやつてのけることができる。マックスもその気満々である。だが演出ゾフィーの指名はヨーゼフに下った。断っておくが、これはたんなるお遊びである。観客である宮廷人たちもそれは百も承知である。しかしゾフィーはそう考えない。お遊びであろうと、観客がいる限りそれは公のものである。ましてハプスブルク一門及びなみいる廷臣たちの目の前での上演である。これ以上公的な催しがあるだろうか。とすれば主役はなにがなんでもヨーゼフでなければならぬ。未来の皇帝はなににつけても第一の座を占めなければならぬ、決して人の後塵を拝してはならない、というわけだ。きまじめだけが取り柄のヨーゼフにしてもとんだ迷惑な話かも知れない。それ以上にマックスは腹の虫が収まらない。同時にマックスはこの母ゾフィーの強引な配役に、兄ヨーゼフと自身との幼年時代の牧歌的兄弟関係がそろそろ終焉に近づいてきたことをしられるのである。

しかし兄弟を取り巻く環境だけでなく、宮廷を取り巻く環境、ハプスブルク王朝を取り巻く環境も次第にきな臭くなっていく。ナポレオンによって攪乱されたヨーロッパに一時的静謐をもたらしたウィーン体制。このメッテルニツヒ畢生の労作ウィーン体制も三十年近くを閲するうちに、綻びが目立ち始め、終いにはずたずたにされていくのである。そしてこのことが皮肉にもウィーン体制の庇護のもとに育ってきたヨーゼフを予想以上に早く皇帝におしあげ、マックスにあの玉座の間での一声を発せさせることになるのである。一体なにがおきたのか？ 一八四八年革命である。

本稿冒頭のように一八四八年十二月二日フェルディナント一世は治世半ばにして退位した。ハプスブルク家始まって以来のスキヤンダルである。しかしヨーロッパではこの種のスキヤンダルは今年になってこれが三度目である。先ず、二月フランス王、ルイ・フィリップが退位、亡命。因みに本稿の主人公マックスは後にこの退位王ルイ・フィリップの外孫にあたるベルギー王女シャルロットと人生を共にすることになる。悲劇の人生だ。その一因をこのスキヤンダルな事件に求めることができるかも知れない。祖父が嘗めた退位という屈辱を我が夫には決して味わせたくはないという妻の必死の思いが、結局はそれ以上の悲劇をマックス夫婦にもたらすことになるからである。しかし、これはまだ先の話である。

次いで、三月バイエルン国王ルートヴィヒ一世が退位を余儀なくされる。バイエルンは隣国。しかもルートヴィヒ一世はヨーゼフ、マックス兄弟の母方の伯父にあたる。オーストリアもうかうかしてはいられない。フランスの二月革命に端を発した革命の炎が翌三月ドイツに飛び火する。折から燻り続けていた自由主義、民族主義運動が無政府主義的なロマン主義をバネに全ヨーロッパに広まる。ヨーロッパを強圧的におさえこむ見せ掛けの平和、「ウィーン体制」を粉碎せよ！これが合言葉である。そして九カ月後、ついにフェルディナントが退位する。まさしく革命である。ただしバイエルン、オーストリアともに王朝はそのまま続くので動乱という言葉のほうが適切か。諸説あるところである。ところでフェルディナント帝の在位は十三年。この間、帝の統治とは宰相メッテルニツヒが次々に差し出す書類にひたすら署名することであつた。このやんごとなき自動署名機械を推し戴きながらメッテルニツヒはヨーロッパに冠たる

検閲制度、秘密警察体制を敷いてきたのである。とはすなわち民衆の意志を圧殺してきたのである。民衆の憎悪は当然メッテルニツヒに向けられる。一八四八年三月、ついにウィーン市民は憲法制定を要求し立ち上がる。だがこの蜂起の際に「帝政打倒！」のスローガンは見られない。聞こえてくるのは「メッテルニツヒを倒せ！」の掛け声だけである。

だとすると、上からの改革によりこの危機を乗り越えられるかも知れない。欽定革命、欽定憲法。さらにだとするとフェルディナント帝にこの改革遂行を期待できるのか、という問題がおきてくる。ここにきて宮廷内で愚帝退位が漸くとりざたされてくる。帝も皇帝の位にべんべんとしがみつく気はない。しがみつくのはメッテルニツヒである。

新皇帝に目されているヨーゼフは聡明。おまけに猛母ゾフィー大公妃が後ろに控えている。けっして自動署名機械とはならない。つまり、今上帝の退位は己の権勢失墜につながることに必定である。絶対に阻止せねばならぬ。メッテルニツヒは市内騒然とするなかホーフブルク宮で皇后マリア・アンナに謁見を求めた。皇后の部屋には折悪しくゾフィーが居あわせていた。宰相はゾフィーに構わず、陛下に退位をなんとか思い止められるよう、お取り計らいを、と皇后に訴える。そして「フランツ・ヨーゼフ大公殿下はまだ成人に達しておられません。殿下に後事を託す前に先ずは、お家の秩序を立て直すことが肝要かと存じます」と力説する。ゾフィーは我が子ヨーゼフの未熟さをあげつらうこのメッテルニツヒの言に怒りの余り、全身をわなわな震わせたという。

しかし遅すぎた。ウィーン市民の要求は次第に先鋭化し、民衆は凶暴なエルネギーを発散させていく。革命の常である。秘密警察と検閲制度への憎悪は募りいくばかりである。「メッテルニツヒを倒せ！」の声がウィーン全市を隈無くこだまする。三月十四日、メッテルニツヒは万策尽き、変装し密かにウィーンを逃亡。かねてから緊密な関係にあったウィーン・ロスチャイルド家が与えた充分すぎる路銀を手に、イギリスに亡命する。オーストリア帝国の舵取りを勤めること四十年の結果である。

メッテルニツヒ逃亡を受けて、翌十五日、フェルディナント帝はウィーン市民を慰撫せんと、市内を無幌馬車で練り歩く。「皇帝万歳！」の聲が通りという通りに響きわたる。興奮した帝は後先も考えずに「余は汝らに全てをあたえよう！」とこたえる。ハプニングだ。

こうしてウィーン市民は憲法制定の約束をほかならぬ皇帝自身から直にとりつけたのである。慈愛溢れる皇帝陛下がかたじけなくもあのように仰せであられる。もうそろそろ潮時だろう。ここらで矛を収めるのも悪くはない、と市民は考える。しかしこう考えるのは彼らだけである。そして気がついているとこのウィーン騒乱の主役の座はすでに彼らの手から離れている。ここで言う彼らとは現在のウィーン市第一区をぐるりと取り囲んでいた市壁のなかに住むれつきとした市民のことである。住まいもある、職もある、家族もある、そして地位もある人々である。

市壁とは皇帝の居城とそれを取り巻く市民社会を守るためのものである。つまり皇帝と市民とはもともと運命共同体なのである。十二の門を抜けて市壁の外に出るとグラシと呼ばれる緑地帯がある。対オスマン・トルコ戦の教訓より市壁から六百歩以内に建物をたててはならぬ、というお触れから生まれた緑地帯である。オスマン・トルコの脅威がおさまったいま、ここは良き市民の憩いの場となっている。緑地が切れたあたりにも人が住むようになる。この住民もウィーン市民の仲間である。この言わば市外区の周りをまた一つの壁が取り巻いている。通称リーニエ。このリーニエの外が真正銘の「門の外」である。「門の外」とは当時の差別語である。「門の外」の住人は市民ではない。「下人」である。近くはウィーン近郊の農村、遠くはチェコ、ポーランド、ハンガリーの農村から食い詰めてやってきた流民、棄民、難民である。市内への立ち入りもままならぬ。リーニエの各大木戸に立ちはだかる徴税吏に頭を小突かれ、あげくに金を規定以上に巻き上げられ、やっと立ち入りを許されるが、それもほんのわずかの間にしかすぎない。時間がくればまた「門の外」に出なければならぬ。(良知力著「ウィーン乱痴氣騒ぎ」参照)

彼らプロレタリアートは最初、市民階級の傭兵となる。しかし、この傭兵たちは雇い主の市民に従順としてはいない。こんなことで矛を収めてなるものか！ 皇帝陛下も糞もあるものか！ 突撃！ 革命だ！

こうなるとウィーン市民とプロレタリアートの戦いとなる。プロレタリアートには失うべきものがなにもない。おまけに学生たちが味方に付く。夥しい流血の後、ついに市門は破られ、興奮した民衆は皇帝の居城ホーフブルクへと迫ってくる。

「無秩序と暴動の妖怪が到るところに徘徊している。農夫たちは領主に、街は君主に逆らっている。おお神よ、一体どう始末をおつけになさるつもりなのですか」。ヨーゼフ、マックスの母ゾフィーはこう日記に記す。いままで比較的冷静であつた彼女もここにきて急にうろたえはじめる。自分の目の前で息子ヨーゼフの幼さをあげつらつたメッテルニツヒはそれにしても小面憎い。あんな男とはもう手を切らなければならぬ。しかし、宰相とのこんな争いもいまとなっては所詮、コップのなかの嵐にすぎない。そんな段階ではないのだ。いまや王朝そのものが危ないのである。メッテルニツヒは逃亡した。神を恐れぬ悪魔どもが我がハプスブルク家を倒し、この国に共和制を敷いたらなんとするのか。息子を皇帝にするという野望は跡形もなくなるのだ。彼女は夫のフランツ・カール大公を通して、メッテルニツヒの欠けた宰相会議に強く打開策を迫る。

帝都ウィーンを脱出。これが宰相会議の採つた打開策である。そしてこれを汐にルートヴィッヒ大公が宰相会議議長を引く。「老人連隊」と陰口を叩かれていた宰相会議はあつけなく瓦解する。

さて、五月十九日、皇帝一家はウィーンを脱出、チロル州のインスブルックに難を逃れる。「私たちは去らなければなりません。ここにいては鼠取りにかかったも同然です。夫と私は子供たちを連れて、私たちが慣れ親しんだ部屋を去りました。二三年間、平穩にそして幸福にすごしたこの部屋に多くの愛着あるものと思ひ出を置き去りにしながら。私た



ちはいつもの四輪馬車で一寸、散歩に出掛けると嘘をつき、ある貴婦人を訪問する振りをしました。しかし、私たちの馬車は途中で向きを変え、ズィークハルト教会にと向かったのです」とゾフィーは日記に記す。両親の馬車に馬でついていくのはマックスである。兄ヨーゼフはこの脱出行に参加していない。彼はこのときイタリアにいた。ともあれ、マックスはこのときすでに十五歳。一見、楽しげなこのピクニックが実は皇帝一家の帝都脱出に他ならないことは充分承知である。

ところでチロル州は熱狂的な王党派の金城湯池である。皇帝一家は行く先々で歓呼の声に迎えられる。インスブルックに着いたとき、ゾフィーは洩らす。「こうしてこの美しい城のなかで我がオーストリア家の先祖の肖像画に取り囲まれたり、我が家に忠実なこの美しい土地を目にすると、まるで生き返ったような気がします」と。しかし、これで事態が変わったというわけではない。帝都ウィーンは相変わらずである。突然、皇帝一家に去られた市民は驚き嘆き悲しむ。早速、皇帝にウィーン帰還を要請するが、いまだはその市民の身そのものが危ういのである。とても皇帝がのこのこと帰れる状態ではない。

事態は一つも変わっていない。変えることができるのは軍だけだ。ハプスブルク家に忠誠を誓う軍人だけがこの危機を救うことができるのだ。皇帝一家は諸將に望みを託す。先ずは猛将ヨーゼフ・ヴェンツェル・ラデツキー元帥。老元帥はいまイタリアにいる。青年將校フランツ・ヨーゼフ大公をその麾下に従えてのイタリア駐屯である。

そのイタリアにも民族主義運動の火の手が挙がる。三月一八日、上部イタリアが祖国奪還を賭けて蜂起する。二二日、ミラノが蜂起軍の手に落ちる。二二日ヴェネチアも決起する。ロンバルディア、ヴェネチア、パルマ、トスカーナからオーストリアを追い出せ！を合言葉にイタリア統一の気運がまきおこる。二四日、サルジニア・ピエモン王国（オーストリア皇妃マリア・アンナの実家である）が反乱軍を支援し、オーストリアに宣戦布告する。イタリア統一運動の

先駆者マツツイーニーはこの蜂起の前年、一八四七年秋にときのローマ法王ピウスIX世に宛てて「猯下！ 猯下の祖国イタリアを一つにして下さい！ オーストリアを篡奪者としてお扱い下さい！」と書いている。法王をイタリア統一のシンボルとし、もつてサルジニア王国主動による統一に牽制を加える、というのが彼のプランであった。サルジニアは動いた。しかし法王は動かない。一見、反王党的で進歩的ポーズを見せるピウスIX世は実は根っからの民族主義嫌い。彼の頭のなかにはバチカンの利益のことしかない。事実、ピウスIX世は「カトリック教会の首長は一国民のために武器をとつて、同じカトリック教徒たる他の国民に立ち向かうことはできない。という回状を発し、自国軍隊がオーストリア領に進むことを禁じた」（岩間徹著「ヨーロッパの栄光」）のだ。こうなればラデツキー元帥は慌てず騒がない。最後の勝利を確信している。二十三日夜のミラノ退却も一時的なものに過ぎないと思つている。「待つてゐるがいい、我々はまた戻つてくるだろう！」という言葉を残し老元帥は悠々とミラノを後にする。

しかし、火の手があがるのはイタリアだけにとどまらない。六月十二日、チェコ人急進派がプラハで蜂起する。ハンガリーも不穏な動きをみせる。もともとラヨシュ・コシュートを頭目に置くハンガリー民族主義運動こそが三月のウィーン騒乱のきっかけを作つたのだ。

要するに、四十八年の騒乱はハプスブルク家家領内の主要な民族、ドイツ人、ハンガリー人、チェコ人、クロアチア人、イタリア人らの鬨ぎ合いのうちに展開してゐるのである。そして彼らのあいだには統一した連帯の発想は見られない。たがいにいがみあうばかりである。いわゆるハプスブルク・シティー各市でおきた民族主義運動は横の繋がりが無く決め手に欠けたまま推移していく。王党派は革命側に楔を打ち込み、それぞれの運動を各個撃破していけばよいのだ。さすが將軍たちはその点には抜かりはない。先ず六月十六日、ヴィンディツシュグレート將軍は皇帝軍を率いプラハを占領、秩序を回復する。併せて同時期、プラハで開かれていたフランティシエク・パラツキーを中心とする穩健自由主

義者たちのオーストリア・スラブ会議をも強制解散させる。ところでウィーンで騒乱を繰り広げていたドイツ人たちはこのプラハ鎮圧の報を聞くと、あろうことか穏健派どころか急進派たちですら喝采を挙げたという。オーストリア帝国内の支配者民族としての自負がそうさせたのか。帝国内のハンガリー人、チェコ人らの民族主義的野心へのドイツ人たちの抜きがたい憎悪が垣間みられるところだ。いずれにせよ、これによってこの度の「革命」がいかに脆弱であるかが益々もって明らかになる。

ヴィンティツシュグレートツ將軍は返す刀でウィーンに入城、急進派をおさえこむ。たやすい事だ。むしろ將軍は歓呼の聲で迎えられたくらいである。さて、それではイタリアは。老練な元帥ラデツキーは先の予言を見事実現させる。七月二十五日、ラデツキー軍はヴェロナ郊外クストツザでサルジニア軍を大破。八月六日、ミラノ奪還。上部イタリアは再びオーストリアの支配下に入る。元帥八十二歳の快挙である。父ヨハン・シュトラウスは早速「ラデツキー行進曲」を作曲し老元帥の快挙を寿ぐ。

インスブルックで不安な日々を過ごしていた皇帝一家は漸く胸を撫で下ろす。勿論、ハンガリーの動向はいまだ気掛かりな状態にあるが、それもそのうちなんとかなるだろう。八月十二日、皇帝一家はウィーンに戻る。東の間の平和がウィーンを訪れる。

ところでフェルディナント一世の即位後ただちに設置された皇帝補佐機関、宰相会議は先に書いたようにすでに瓦解している。いまや帝国の実権は諸将にある。だがラデツキーはすでに老齡、そんな野心はさらさらしない。元帥は根っからの軍人である。政治に携わる煩を嫌う。すると実権はその軍功によりおのずからヴィンディツシュグレートツ將軍の手に落ちる。將軍の義弟シュヴァルツェンベルク侯爵も俄に力をつけてきている。そして彼らはハンガリーをこのままにしておく気などさらさらしない。王党派の勝利はハンガリーを制圧してからのことである。

ハプスブルク家領内のさまざまな民族集団のうちハンガリー人はかつて強大なハンガリー王国をつくりあげた民族である。去る史家言うところの「歴史的民族」である。その「歴史的領土」にいまも住みながら、過去の栄光を恃むところ甚だ強い民族である。その強烈な自負心がハンガリー人をしてオーストリア帝国領内においてドイツ人に次ぐ第二の地位に押しあげたのである。そして、いまやハンガリーは帝国内の言わば「自治国家」の様相を呈し始め、ハプスブルク家の喉もとに匕首を向けている。チェコ、イタリアでの革命側の敗北にも怯むことなく、完全独立への意気は旺盛である。しかし、ハンガリー人は被支配者民族でありながらまた同時に支配者民族でもある。その「歴史的領土」に住む他民族、ルーマニア人、スロヴァキア人、セルビア人、クロアチア人を隷属させている。三月革命でフェルディナント一世より獲ち得たハンガリー憲法はすこぶる民主的なものである。しかし、その恩恵は他民族に及ぶことは決してない。他民族の自治権要求を断固として撥ねつけ、ひたすらハンガリー化を押しつけるだけである。当然ながら反抗を呼ぶことになる。これならハプスブルク家のほうがずっとましである、というわけだ。帝国政府としてはこのハンガリーのアキレス腱を突けばよいのだ。イエラチツチ將軍は九月、クロアチア軍を率いハンガリーに進入する。十月六日、帝国政府はこの「自治国家」に宣戦を布告する（ハンス・コーン著、稲野強他訳「ハプスブルク帝国史入門」参照）。

四十八年革命はいよいよ大詰めを迎えた。ところがこの宣戦布告はいままで抑えられていたウィーン急進派の意気を吹きかえさせることになる。ハンガリー独立運動の志士ラヨシユ・コシュートの絶大な人気が彼らを再び立ち上がらせたのか。軍の武器庫が襲われ、ウィーンはまたも混乱の極に達する。皇帝が危ない！ 皇帝一家は難を逃れんと再びウィーンを脱出。オルミュッツ（オロモウツ）に宮廷が移る。

しかし、今回のウィーン蜂起は燃え尽きる前の蠟燭の最後の一闪に過ぎなかった。プラハ駐屯のヴィンディッシュグレーツ將軍は直ちに皇帝軍を率いウィーンを包囲。イエラチツチ將軍もこれに呼応。十月三十一日、ウィーン落城。革命

は潰えた。「皇帝万歳！」の声がウィーン中にこだまする。だが、皇帝一家はオルミユッツを動かさない。ウィーン凱旋の前にはしなければならぬことがある。国家体制の立て直しこそが、ハンガリー制圧を前にした帝国政府の急務である。立て直しとはフェルディナント一世が譲歩に譲歩を重ね、気前よく与えてきた諸改革の約束を全て反故にすることである。全ての帝国臣民に対して使徒的皇帝陛下への忠誠を改めて強いることである。新絶対主義の登場である。皇帝陛下には颯爽として毅然として貫わなければならない。すなわちフェルディナント一世の退位である。

義兄ヴィンディッシュグレート将軍の強力な後押しにより帝国宰相に就任したシュヴァルツエンベルク侯爵は帝国再建の足掛かりを帝位交代にもとめ慎重に事を進める。問題は新皇帝である。相続順位法によれば、フェルディナント帝の弟のフランツ・カール大公である。しかし、宰相を始め重臣たちは大公を皇帝に戴く気はない。大公は先帝の補佐機関、宰相会議のメンバーとして既に旧体制の垢がしみついている。おまけに凡庸である。ここは新体制の名に相應しいフレッシュな皇帝でなければならない。マックスの兄ヨーゼフの出番である。歳は一八と若い、老練な重臣たちがついている。なによりも聡明である。父フランツ・カール大公も息子をこうも褒められると悪い気はしない。親子の間の血みどろな闘いなどここにはない。そんなエネルギーは父大公には皆無だ。そうでなければ自分でさっさと皇帝になっているだろう。大公は相続権放棄に同意する。大公の妻でありヨーゼフの母であるゾフィー大公妃にも異存がある筈がない。むしろ夫を差し置き息子を帝位に即けることを主張したのは彼女であった。こうして、二四年前、バイエルン王家から「世継ぎのプリンス」を生みにハプスブルク家に嫁いできたゾフィーの宿願は漸く実現することになる。

勿論、事は秘密裡に運ばれた。ヨーゼフの弟マックスですらこの帝位交代を知らされたのは即位式のわずか数日前のことである。否、シュヴァルツエンベルク侯爵はこの情報がマックスに漏れることを一番嫌った節がある。兄ヨーゼフの即位に弟マックスの意向など毛筋も容れさせてはならぬ。若い新帝の即位の暁にはその連枝はただ邪魔な存在だけで

ある。王朝組織とは君主とそれを取り巻く重臣でなる。連枝など二の次、三の次である。これが侯の基本的な考えである。

とすると本稿冒頭に書いた即位式でのマックスのときならぬ一声は全く尊棧敷に置かれていたことへの抗議の一声であつたのか。そうかもしれない。そしてその抗議には自分が兄皇帝の良き助言者、藩屏となる決意が秘められていたのかもしれない。しかし、このときマックスは自分と兄皇帝の間には既に幾重もの藩屏が、即ち人間の壁が張り巡らされていることを知らない。

ともかく帝位交代が行われた。いよいよハンガリー制圧である。ヨーゼフ自ら戦場に立つ。いうなれば親征である。勢い兵士の士気は上がる。新皇帝にとつても恰好のお披露目となる。マックスも兄に従いハンガリー遠征軍に加わる。

一八四九年六月二六日のことである。

「我々の皇帝は素晴らしい限りであります。ラープで遠くに砲声を聞くやいなや、皇帝は手綱捌きもあざやかにみごとな跑足で前方にいた部隊の真ん中に踊り込みました。自分たちと危険と苦勞をわかちあつてくれる皇帝に兵士たちがどれほど喜び、歓声を挙げたかお分かりになられると思います。部隊が街に入るか入らないうちに、皇帝はすでに燃えさかる橋の上におりました。しかし、それにしても皇帝がいまにも焼け落ちんとする橋の上を疾駆するさま、そしてそれを両陣營の部隊が茫然と見つめている様子はなんとも感動的な瞬間であつたことでしょう。それは私がいままで目にしたなかでもっとも美しいシーンでありました。皇帝の右手で一軒の家が焼け、そこから敵はフランツ・リヒテンシュタインを撃ち倒しました。皇帝自身は橋の上を忠実な兵士たちに囲まれるようにして進みました。兵士たちはみな口々に『皇帝万歳！』『神よ御照覧あれ！』を交互にそれこそ怒鳴らんばかりに唱えておりました。こうした感動はまさしく軍隊にしか見られないものであります」。マックスがゾフィーに宛てた手紙の一節である。しかし、この従軍記はいささか

大袈裟に過ぎるようだ。何しろ記者がすっかり興奮してしまっているのだからそれも仕方が無いところだろう。いかにもマックスらしい。彼は兄ヨーゼフの雄々しい姿に栄光溢れる我がハプスブルク家の再興を見たのか。彼のロマンチックな感傷はいやがうえにも駆り立てられる。中世の騎士はかくあつたのだ！一方、「シュヴァルツェンベルク侯など皇帝の背後に隠れ、まるでアヒルの後ろに逃げ込むめんどりさなからでありました」。マックスは陶醉していく。一方、こんな従軍記を読まされる母ゾフィーは気が気ではない。生きた心地がしない。それ以上に現場の諸将は肝を冷やす。迷惑この上ない。戦争のいろはを知らぬ一六歳の公達は己の興奮に酔っていればそれですむ。だが、全軍の命運、延いてはオーストリア帝国の命運を預かる諸将の目にとっては皇帝の雄姿は戦術に破綻を来たすやも知れぬ軽率な行動としか映らない。万一のことがあつたらなんとする。

マックスに卑怯者呼ばわりされたシュヴァルツェンベルク侯爵はさすが老獪である。これで新皇帝のお披露目はすんだ。その成果は十分に過ぎるくらいだ。皇帝は軍の絶対的忠誠心を手に入れた。これ以上、青年皇帝を戦地で危険に晒しておくわけにはいかない。侯爵は諸將と諮りヨーゼフ、マックス兄弟を七月六日、とはすなわちマックスの誕生日にウィーンのシェーンブルン宮殿にお帰り願うことにする。母ゾフィーは殊の外喜び、侯爵の適切な処置にいたく感謝する。ヨーゼフも戦地での興奮も醒め、自分の立場を改めて知り、侯のとつた処置に満足する。収まらないのはマックスだ。なぜ我が家の運命を自らの武運で切り開いてはならないのか。悔しい、と。その鬱憤晴らしか、マックスは宮廷の誰彼に戦地での見聞を講釈師よろしくまこと大袈裟にかつ饒舌に語って聞かせる。ヨーゼフが苦笑いしながら一々、訂正してまわらねばならないくらいであった。

さて、帝国政府はハンガリー制圧の早期決着を図ってロシアのニコライ一世に支援を要請する。それを受けてロシア軍は八月一三日、ハンガリーに侵入する。これによりハンガリー軍はヴィラーゴッシュにて降伏。コシユートもすでに

トルコに亡命。ハンガリー独立の夢はついに粉碎される。続いて二四日、イタリアで最後まで抵抗を続けていたヴェネチアも力尽き降伏する。前年三月からの一連の革命騒ぎは反革命側、ハプスブルク家の勝利のうちに終息する。

いよいよフランツ・ヨーゼフ一世時代の幕開けである。この年、マックスは一七歳の誕生日を迎えた。直系のオーストリア大公であるため一七歳で成年に達したと宣言される。フェルディナント・マクシミリアン大公家を興し、年間歳費七万五千グルデンが支給される身分となる。因みに傍系大公の場合は二〇歳になって初めて成年となり、歳費も四万五千グルデンである。ところでマックスは誰に、成年に達したと宣言されたのか。言うまでもなく一族の長である兄、フランツ・ヨーゼフ一世皇帝陛下にである。革命騒ぎが終息し世の中が落ち着きを取り戻すと、兄が皇帝になったという事実がマックスの心に重くのしかかってきた。あのつい半年前の「このペンを手にする資格は私にしかないのだ！」という一声はマックスの胸の裡に虚ろにこだまするだけで誰も耳傾けようとはしない。すべてがシステムとして処理され、完璧な閉空間が形成されていく。陛下にお会いするためにはマックスといえども前もって謁見の許しを求めねばならない。それもいつでも許されるとは限らない。陛下への非難めいた言葉も決して洩らしてはならない。独自の行動は厳に慎まねばならない。皇位継承順位第一位者のそうした行為はたちまち謀叛の嫌疑をかけられる。マックスのまわりにはそれとなく密偵が配備される。兄が皇帝になるということは弟にとってはこういうことなのだ。王朝組織という閉空間のなかでマックスはどういう道を歩むのか。暫くその風景を眺めてみよう。（この項続く）

（参考文献、引用文献及び注は煩を避けるため本稿完成時にまとめて列記したい）



# Der tragische Kaiser von Mexiko, Maximilian I ...〔II〕

... Der ältere Bruder wurde Kaiser. ...

Yoshio Kikuchi

Am 2. Dezember 1848 dankte Ferdinand I. von Habsburg-Lothringen in Olmütz, wohin die Kaiserfamilie wegen der revolutionalen Ereignissen in Wien verzogen war, als Kaiser von Österreich ab. Und der Bruder des Kaisers, Ferdinand Karl verzichtete zugunsten seines Sohns Franz Josef auf den Thron. Erzherzog Franz Josef, der damals erst 18 Jahre alt war, bestieg den Thron als Kaiser Franz Josef I. von Österreich. Das war die Geburt des jungen und frischen Kaisers, worauf alle Untertanen lang in Österreich gewartet hatten. Die hohen Staatsdiener in Wiener Hof wollten durch diesen Thronwechsel die größte Krise, die die Donaumonarchie einst erlebt hatte, vermeiden oder verdecken. Der neue Kaiser sagte in einer Proklamation, „daß es mir gelingen werde, alle Länder und Stämme der Monarchie zu einem großen Staatskörper zu vereinigen.“

Jedenfalls wurde der ältere Bruder nun Kaiser. Was bedeutet dieses dem ehrgeizigen Bruder des neuen Kaisers, Erzherzog Ferdinand Maximilian, dessen Spuren bis zum tragischen Ende ich bestätigen möchte? Zuerst bekam Maximilian das erste Thronerbrecht. Es schien auf einmal, daß Maximilian eventuell den Thron besteigen könnte.

Nur einen Schritt dazu, aber dieser Schritt war zugleich hoffnungslos lang.

Maximilian wollte der gute Helfer und Ratgeber seines älteren Bruders werden, der die Regierung der von Revolutionen erschütterten Monarchie übernahm. Aber der neue Kaiser, Franz Josef I. brauchte keine Hilfe von Maximilian. Er hatte schon genügend Ratgeber : die hohen Staatsdiener unter dem Kaiser, auf deren Gipfel Fürst Felix Schwarzenberg stand. Der Präsidentminister Schwarzenberg, der bei diesmaligem Thronwechsel dazu ernannt wurde, hielt den Hilfwille des ersten Thronfolger für unnötig, sogar für sehr gefährlich. Die Aussagen und das Verhalten des ersten Thronfolgers werden, wenn es einmal schief geht, sofort das Monarchiesystem zerstören. Die Organisation der Monarchie muß alle privaten Gefühle möglichst ausschließen und alles systematisch behandeln. Das ist ja die neue Donaumonarchie und der Weg zum neuen Absolutismus, den Schwarzenberg unter dem Namen Franz Josefs I. verwirklichen wollte. In dieser Hinsicht entstand der Gegensatz zwischen dem neuen Monarchiesystem und dem Wille von Maximilian, der ausschließlich auf der brüderlichen Beziehung beruht. Und Maximilian wurde durch die Strategie der Organisation von dem älteren Bruder weit entfernt. Die hohen Staatsdiener unter dem Kaiser verhinderten Maximilian den Weg zum älteren Bruder. Maximilian versuchte es vergebens.

Nicht nur das, sondern auch die Spione des Kaisers machte heimlich Aufsicht über Maximilian. Die Tatsache, daß der ältere Bruder Kaiser wurde, übte auf diese Weise die Einflüsse auf Maximilian aus. Dieses Symptom erschien schon bei der Krönung des älteren Bruders. . .